

## 二度目を迎えた「農大の先生」

鳥取県立農業大学校 遠藤 英

平成30年4月より、農業大学校（以下、「農大」。）に赴任し、二度目の農大生活を迎えることとなりました。ただただ走り続けた一度目の赴任5年間の反省等を踏まえ、新たに今、自身が目指す「農大の先生」について考えます。



### 1 「農大は学校であり、職員は先生」

当然ですが、農大の職員は学生を指導する「先生」であり、実際に先生と呼ばれます。これは、普及員時代と大きく異なる点で、より教育的要素が強く、教職員としての資質等が必要となります。一度目の赴任当初は、このことに大きな困惑を覚えました。「技術・知識・経験と全てに乏しい自分が先生・・・務まるのか？」と。ただそれは、自信の無さからくる後ろ向きな姿勢の表れであり、農大の先生を務める覚悟・決意等を持ち合わせていなかったに過ぎません。まずは、新技術等も取り入れながら、学生指導等に耐える確かな技術・知識等を身につけます。これが基軸となります。また当時の自分は学生と十分向き合えていませんでした。二度目を迎えた今も、そのことを深く反省・自覚し、自問し続けていく必要があると考えています。農大の先生になるために、前向きに自己研鑽に努めます。

### 2 「考える・行動するきっかけを作ってやりたい」

「師弟同行」、「率先垂範」は農大の教育方針を代表する言葉で、日々その言葉を噛みしめながら学生と接しています。指導する側として率先し、手本を見せつつ、花き等の作物を学生と共に育て、考え、悩みながら、農業技術だけでなく、共に人間性も磨き合っています。農大の果たす役割として、時に後者（人間性を磨く）の比重が年々高まっていると感じています。

そこで、意識して行っているのが、学生の自主性等を引き出すための「きっかけ」作りです。例えば日々の作業においてもいくつかのモデル・考え方を示し、学生に考えさせます。示すモデル・考え方は、必ずしも正解でなくて良いと考えています。そうすると、学生は時折、こちらが考えつかない良いアイデア等を見いだしたりもします。また、驚くほど積極的に行動・実践もしてくれます。「先生、それは違うよ、こうだよ。」なんて嬉しそうに言いながら。次に同様な場面に遭遇した場合は、今度は選択肢を示さなくても、学生が自ら選択肢を考え、実践するようにもなってくれます。「きっかけ」が成就した瞬間です。今後も、「きっかけ作り」の方策を探求し続け、一つでも多く、学生の自主性等を引き出せればと思います。

### 3 終わりに・・・

農大の先生も普及員も行うことはいつも同じで、「農業者の成長」を見守り、共に成長することです。農大の場合は、指導対象が学生等であり、より明確化されているだけです。普及員時代もいつも感じていましたが、指導してもらっているのは、いつも自分の方です。農大でも同様に、学生から学ばせてもらってばかりです。ただその中で、新たな「気づき」等を一つでも学生と共に分かち合えればと考えています。学生に常に耳を傾け、学生の発する小さな声を逃さず、感じとってやりたいなと考えています。学生と共に成長していきたいと思っています。